

鹿沼グループ  
代表取締役

# 福島範治



ふくしま・のりはる。1970年7月28日、東京都生まれ。50歳、青山学院高等部→青山学院大学。初等部3年生でラグビーを始め、社会人まで21年間プロップ。卒業後は(株)第一勧業銀行(現みずほ銀行)入行。6年目で主将を務めたのちに退行し、父親の急病に伴い鹿沼グループへ入社。企業再生にあたる。2009年、1学年下の武居健作氏の大学ラグビー部監督就任時にマネジメントスタッフとなり、監督と共に8年間裏方を務めた。その際に遅ればせながらマネージャーの有難みを実感。歴代主務やマネージャー達との縁は、いまも大切にしている。初等部コアアライズ先生の教えにもらったラグビーとは「楽・苦・美」という言葉は、ラグビーの大切な価値観として根付き、いまの経営への思いにも通じている。

ゴルフ場で花火大会、フェアウェイにテントを張ってキャンプ…。

ゴルフ界で、これまでの常識を破る企画を次々と打ち出しているのが、栃木に本拠を置く鹿沼グループだ。

名門・鹿沼カントリー倶楽部をはじめ、県内3か所のゴルフ場を運営する同グループの代表取締役・福島範治さんは、喜望大でラグビーに打ち込んだ元プロップである。

昨年、新型コロナウィルスで少ない影響を受けたゴルフ界だが、屋外でソーシャルディスタンスを保てるスポーツという認識が定着。一時の落ち込みから回復してきた。ただ、これまで収入源だったコンペやパーティーがなくなり、新たな戦略を模索中なのだ。

「攻め込まれてもターンオーバーの精神で逆転しよう」と

そのレジリエンスはラグビーで培われた。初等部3年でラグビー部に入部するも、練習がきつく一度は退部。書道部に入るが思い断ちがたく、先生に許しを得て再入部した。

「親友と一緒に行って、先生に、もう一度やりたい」とお願いした。今でもあの場面は覚えてます」

大学に進学すると、周りは久我山、大阪工大高、茗溪学園…。花園出場は当たり前、高校ジャパン候補がゴロゴロいた。

「周りはキラ星ばかり。最初は、内政部進学の軌跡がありました」

高等部の先輩に、神戸製鋼で活躍したWTB富岡剛至さんがいた。富岡さんは当時まだ珍しかった筋トレを練習に取り入れていた。

「試合に出たいなら筋トレをやれ」すぐジムに入会して身体を鍛えた。「私は技術もないし、身体も小さい。何かで勝るしかない、と」

大学3年時に大けがを負うも、半年間リハビリを続けて夏前に復帰。そのまま3、4年と先発に定着。4年時は対抗戦5位に食い込んだ。

就職も当初はメーカー志望も、前の経営者でもあった父親の助言で進路を変えた。

「会社を継いでくれとは言わない。ただ、銀行に入ったほうが、社会の仕組みを覚えられる。将来やりたいことができたとき役に立つのでは」なぜかそのひとことが胸に沁み、第一勧業銀行(現みずほ銀行)に就職する。当時は関東社会人の強豪。

慶大で日本一になったメンバーもあり、バンカーの仕事とラグビーの両立は充実していた。

父が病に倒れたのは、ラグビー部主将を務めていた入行6年目。会社の借金もかさんでいた。悩んだ末に銀行を退行し、会社を継いだ。

「自分の道を生きて行けと言われていましたが、私が戻らなかつたら、父はどうなるんだろうと。今思えば父が好きだったんでしょね」

だが、経営に関してははずぶの素人。

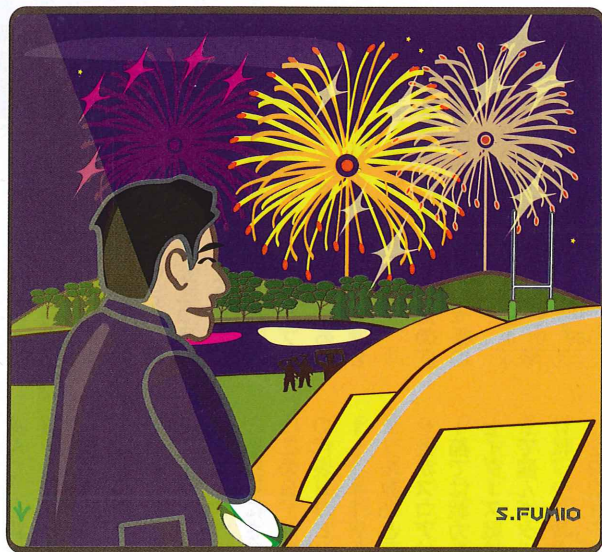
「右も左もわからない。入った月から頭を下げて社員の給料カット。やめられた役員もたくさんいます」1年に364日働き、徹底的に本を読んだ。

「当時はコンサルタントを雇う余力もない。千冊は読みました」数年で立て直すも、今度は金融危機で取引先の銀行が国有化。2004年に民事再生手続を申請。再び10年かけて会社を再興した。その道のりは経済誌にも取り上げられている。

その後も東日本大震災や、鬼怒川の氾濫などの災害に見舞われた。そして今回の新型コロナウィルスだ。「何年かに1回危機はありましたけど、そのつど復活してきた。今回のコロナもピンチですけど、チャンスに変えようというマインドを持てた。それは私だけでなく、これまでの経験で会社全体が得た力です」

昨年の緊急事態宣言下、動き出しは早かった。影響の長期化を予想、フェイズに合わせたプランを作成、いち早くレストランには仕切りを取り入れた。チャリティプロジェクトを充足させ、ポロシャツをデザインして販売。医療従事者に一部を寄付したり、SNSを積極的に活用して、35歳以下の会員を2倍に増やすなど、時代を捉えた営業を続けている。

今年の5月29日には、鹿沼市と協力して花火大会を開催。地元のケー



# 芝と歩む。

ブルテレビが中継する。

「ゴルフ場は山の上にあるので、町からも見える。市民の皆様喜んでもらって、貢献したい」と

もちろんゴルフ場の命である芝を傷めないよう細心の注意を払い、翌日は総出でコースの清掃も行う。

「うちは異端児かもしれませんが、ベースは大学時代の体験だ。私のラグビーは挫折から始まった。

苦しいところから立ち上がる力はラグビーで得られました。ラグビーのゲームは倒れて起き上がって、再び走りだす繰り返し。人間を作るといふ意味では、今の時代こそ、ラグビーが合っている気がします」

子供の頃から、芝の上が活躍の場だった。今は起伏もあり、ハザード(障害物)もあるゴルフコースが、戦いの場だ。

TEXT:Yuko MORIMOTO  
ILLUSTRATION:Fumio SATOH